＜資料＞

津田塾大学学生授業参観レポートより

②クラスの雰囲気の重要性

しかし、この研究授業を通して最も印象に残ったのは、実際には授業の活動内容よりも、このクラスの圧倒的な雰囲気のよさであった。授業中、肥沼先生がフラッシュカードをホワイトボードに貼り付けようとするが、マグネットの磁力が弱く貼り付けられないというアクシデントがあった。このとき生徒たちは、うまく貼り付けられなかった際、残念そうに「あぁ～」と反応し、やっと貼れたときには「おぉ～」と大げさに反応していた。このやりとりは非常にほほえましく、授業の見学者からも笑いがおこっていた。

このような教室の雰囲気の良さが感じられる場面は、授業後の終礼でも顕著に見られた。終礼中、生徒たちは少しも恥ずかしがったり恐れたりすることなく、まるで友達同士で会話をしているときと、大差ないような様子で、どんどん発言して~~いて~~いた。

この雰囲気の良さはどこからくるのか。疑問に思っていると、配布資料の中に、これまでの終礼での「先生のお話」が添付されていた。目を通してみると、「先生のお話」といっても、肥沼先生が一方的に話しているのではなく、終礼での先生と生徒のやりとりがきめ細かく記録されている。そこでも先生は積極的に生徒に問いかけをし、生徒に自ら考え発言させることを多く求めていた。

おそらくこの積み重ねが、このクラスの雰囲気の良さにつながっているのだろう。肥沼先生が生徒に対して常にオープンに接することで、生徒もそれを信頼し、親近感を持って先生と接することができている。これが英語の授業（特に Pair Work など）を円滑に~~活用する~~おこなうことを可能にしている。改めて、積み重ねられたクラスの雰囲気づくりや先生の生徒の信頼関係が、良い授業を作り出すということを感じられた研究授業であった。

※以上の記録の前にも２ページ分の授業分析がありますが、１つ１つの活動における授業者のねらいを鋭く分析していて、まだ教育実習の経験もない学生がそこまで見抜けるのかと大変驚きました。